

英語教科書小史

英語教育講座 鈴木 渉

0. はじめに：英語教育の動向概史

今年度の図書館主催による教科書展は、英語です。実際には、英語以外の言語も教えることができるので、「外国語」が正式名称なのですが、英語がほぼ事実上全国の小・中・高等学校で教えられているので、ここでは「英語」という名称を使うことにします。

日本人にとっての英語は、文化 5 (1808) 年の長崎フェートン号事件、嘉永 6 (1853) 年のペリーの浦賀沖への来航、嘉永 7 (1854) 年の日米和親条約と安政 5 (1858) 年の日米通商条約の締結、明治元 (1868) 年の明治維新等を経て、熱を帯びてきたと言われていています。当時の日本が、イギリスやアメリカをはじめとする欧米諸国の文化を取り入れ、一日でも早く追いつき、富国強兵に努めなければならなかったことを考えれば、日本人が英語学習に夢中になったのは想像に難くないでしょう。

しかし、明治 27 (1894) 年の日清戦争や明治 37 (1904) 年の日露戦争の勝利を経て、大正 3 (1914) 年の第一次世界大戦の参加、1920 年代にはアメリカとの関係の悪化、昭和 8 (1933) 年には国際連盟から脱退、昭和 16 (1941) 年には太平洋戦争に突入という時期になると、英語は敵国語となり、英語ブームが一段落するようです。特に戦時下の英語教師にとっては、この頃が受難の時代だったことは容易に想像できるでしょう。

太平洋戦争後は、一日も早く敗戦から立ち直り、欧米諸国に追いつこうと、英語ブームが再び訪れます。中学生全員が英語を学習するようになるのもこのころだと言われており、英語は一部のエリートのものだけではなくなりました。また、戦中・戦後は日本人の海外旅行がかなり規制されていましたが、昭和 39 (1964) 年に海外旅行が自由化されたことも、ブームに拍車をかけたことでしょう。

高度経済成長以降、経済大国になった日本は欧米から学ぶことはないというような意見もありましたが、現在でも経済界を中心に「役に立つ英語」の必要性が叫ばれるようになっていきます。いわゆる、知的訓練や教養としての英語ではなく、(実践的) コミュニケーションのための英語が求められているのです。平成 25 (2013) 年 12 月 13 日に、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」が発表され、小学校で行われている外国語活動の教科化、中学校でも高等学校と同様に「英語で授業」を基本とするなどの提言が文部科学省から出されたのも記憶に新しいところです。

続けて次ページからは、各時代の英語教科書の特徴を通史的に紹介します。なお、当紹介文をはじめ展示全体については、伊村元道(2003)『日本の英語教育 200 年』(大修館書店)と江利川春雄(2008)『日本人は英語をどう学んできたかー英語教育の社会文化史』(研究社)を参考にしました。

1. 明治・大正・昭和初期の教科書

明治元（1868）年から明治 18（1885）年までの英語教科書は、外国からの輸入ものであったと言われています。例えば、明治 16（1883）年に出版された『New National Readers』（A.S. Barnes & Company）が代表的な当時の教科書です。この教科書は、アメリカの小学生用の国語教科書で、5 巻まであり、アメリカの家庭生活や田園風景や動物が話題としてよく出てきます。巻が進むにつれて、教訓的な内容、小説が多くなるのも特徴です。この教科書は、アメリカの小学生用の国語教科書であったため、英語を初めて学ぶ日本人用教科書として扱うには困難であったことは想像に難くありません。この教科書は、教師用マニュアルを見て分かるように、英語を日本語に訳して、利用されていたのだろうと推測されます。

明治 19（1886）年以降は、検定教科書がスタートし、輸入教科書ではなく、日本人にとって理想の教科書を作ろうという考えが出てくるようになります。その最初が『The Mombusho Conversational Readers』（文部省）だと言われています。この教科書の 1, 2 巻は、文法事項を順序立てて配列し、それを徹底的に反復学習させるという意図を持って作成されています（伊村, 2003）。文も基本的に短く、反復練習に適しており、英語を日本語に訳さないで勉強するという考えが伝わってきます。3, 4, 5 巻では、教師と生徒の会話、物語、物語の内容についての Q&A、の 3 部構成が基本であり、こちらも日本語を介さないで、英文を理解させようとする姿勢が伝わってきます。

明治 30（1897）年以降は、検定教科書が教科書の 96% のシェアを占めるようになります（伊村, 2003）。中でも特筆すべきは、昭和元（1926）年に出版された『The Standard English Readers』（開拓社）です。著者はイギリス人のハロルド・E・パーマー氏で、氏は日本の英語教育の近代化に尽力した人物として知られています。この教科書も、『The Mombusho Conversational Readers』と同様に、日本語を介さないで、口頭による反復練習によって、英語を身につけることを念頭において作成されていると考えられます。しかし、内容は無味乾燥でつまらないものが多く、さらに、言語的には、語彙数も多く文法的にも難しかったと言われています（伊村, 2003）。

戦時下の英語教科書で注目されるのが、国策会社である中等学校教科書株式会社が作って文部省の検定を受けた『英語』です。これは、昭和 19（1944）年に出版されています。これまで同様、イギリスの食事、クリスマス、イソップ物語などの欧米の内容もありますが、いかにも戦時中らしい内容も見られるようになります。例えば、Lesson 32 Be a Good Japanese Boy! には、以下のように記されているそうです（伊村, 2003）。

We stand in a line, turn toward the Imperial Palace and bow.

We thank our soldiers and sailors for their brave deeds.

We pray for our success in war.

本学には昭和 21（1946）年に検定されたもののみ所蔵があるのですが、この箇所をはじめとする軍国主義や侵略や天皇制に関する記述は削除されています。この他にも、戦時中には Nippon と記載していたものを Japan に差し替えたほか、大東亜共栄圏の地図や日の丸が削除されています。これらの削除箇所から分かるように、戦時下の英語教科書の特徴としては、男子の英雄的な記述、戦争の賛美、大東亜共栄圏や天皇制の記述が挙げられます（江利川,

2008)。

2. 「戦後」の教科書

新制中学校が発足して初めての国定教科書が、『Let's Learn English』（教育図書）です（伊村, 2003）。Book 1 は文法学習用ではありますが、比較級や関係代名詞まで出てきており、初学者にとっては困難だったことでしょう。I have a bicycle. の疑問文が Have you a bicycle? であることや、戦前の教科書が This is～で始まっていたのに対し、I am～で始まるようになったのも注目に値します。Book 2 や Book 3 は、戦時中の教科書が口頭中心であったのと対照的で、リーディング中心となっています。

昭和 23（1948）年に検定された『Jack and Betty』（開隆堂）は、当時最も採用された教科書（計 3 巻）として有名です。内容はアメリカの中産階級の家庭生活や学校生活を中心に描かれています。戦前の教科書や『Let's Learn English』のようなリーディング中心の教科書ではなく、口頭表現中心のものであることは特筆すべきでしょう。教授資料（教師用マニュアル）にも書かれていますが、訳読を前提にして作成されてはいません。また、文法項目も各巻には段階的に配列されていることも注目したいと思います。細かい話にはなりますが、第 1 巻では、I am a boy. から始まっている点や、Have you any sisters? と do を使った疑問文となっていない点などは『Let's Learn English』と類似しています。しかし、脚注に新出語句が出ていることや、本文の上に Jack, Betty, Jack to Betty, Betty to Jack のように発言者を示している点は異なっています。この教科書の人気は 1950 年代まで続いたと言われています。

『The Globe Readers』（研究社）は、昭和 29（1954）年に検定され、口頭中心の『Jack and Betty』と対照的に、リーディング中心だった教科書として注目すべき教科書でしょう。

3. 「経済復興」「高度経済成長」時代の教科書（1957～1976）

昭和 40（1965）年に出された『The Junior Crown English Course』（三省堂）は当時としては珍しい英語教科書だと言われています（伊村, 2003）。まず、巻頭のカラー写真 2 枚が目を引きまします。内容としては、Tom と Susie が主人公で、2 巻では、日本人画家 Mr. Kato が Tom と Susie の町を訪ねます。3 巻では、ブラウン一家が世界旅行に出かけ、日本を訪れて Mr. Kato と再会し、インドやアフリカを旅するなど、当時の教科書としては、欧米一辺倒ではないことに注目すべきでしょう。

また、『Let's Learn English』や『Jack and Betty』とは異なり、Lesson 1 が I have a book. で始まっている点が興味深いでしょう。Have you～? を Do you have～? のアメリカ式にしたのもこの本が最初であると言われています。もう一つの特徴が、各巻の巻末についている折込式チャートで、使い方を説明した Chart Drill も付いている点です。その後出版された教科書にはこのチャートが付くようになっており、この教科書がいかに画期的なものであったかがわかります。

この時期は経済復興や高度経済成長下にあって、教科書の内容に日本を題材としたものが徐々に見られるようになりました。例えば、昭和 46（1971）年検定、昭和 49（1974）年改訂検定の『New Prince English Course』（開隆堂）では、2 年生用テキストに、小泉八雲文学

の Mujina が登場しています。『New Horizon English Course 2』（東京書籍）では、Akio Ogawa という男子生徒がアメリカに行き、アメリカの学校について学んでいるという話題が出てきます。

昭和 36（1961）年に検定された『The New Globe Readers』（研究社）は、『The Globe Readers』同様に、リーディング中心の教科書でした。しかし、英語の授業時数も週 3 時間に減らされ、語彙や言語材料が削減されたため、この教科書をはじめとするリーディング中心の教科書は消えていくこととなります。

4. 「ゆとり」「自己教育力」時代の教科書（1977～1997）

戦後 30 年が過ぎ、日本の経済的復興が達成され、「ゆとり」志向が始まったと言われています。週 4 時間であった英語が週 3 時間になり、それとともに言語材料や語彙数が減らされています。リーディング中心の教材が少なくなるなど、その影響を教科書は受けるわけですが、教科書の内容は、これまで続いてきた欧米中心の内容から、多文化主義や日本人としてのアイデンティティを強調する題材が見られるようになってきます。

例えば、アジア、アフリカ、中南米などの題材が、昭和 56（1981）年度の教科書では 12% であったのに対して、平成 5（1993）年度では 32% に急増したと言われています（江利川、2008）。例えば、平成 8（1996）年に検定された『New Horizon 2』（東京書籍）の Unit 5 では、アフリカの子どもたちを救おうという題材を取り上げています。

この頃になると、日本文化を積極的に発信しようという題材などが取り上げられるようになってきているのも特徴的です。江利川（2008）によれば、1993 年の時点で、日本人が登場するレッスンが 74% に達し、アメリカ人の 53% を上回ったということです。平成 8（1996）年検定の『New Horizon 3』（東京書籍）では、日本初の女性狂言師である和泉淳子さんのインタビューが題材となっています。また、平成元（1989）年検定の『New Horizon 3』（東京書籍）では、日本文化である書道がテーマになっているレッスンもあります。さらに、平成 8（1996）年検定の『New Crown 2』（三省堂）では、アイヌ民族の文化と言語が題材となっています。

しかし、日本人としてのアイデンティティを強調しつつも、過去への反省を忘れていない点も指摘したいと思います。例えば、平成 8（1996）年検定の『New Crown 3』（三省堂）では、広島に投下された原爆を取り上げながら、平和の重要性を考えさせる題材を取り上げています。

多文化主義のような地球規模の問題として、環境問題が教科書に出てくるのもこの時期です。例えば、平成 4（1992）年検定の『New Horizon 3』では、酸性雨や地球温暖化が題材となって紹介されています。

5. 「生きる力」養成時代の教科書（1998～2007）

前の時代に引き続き、この時代の教科書には、欧米にこだわらずグローバルな視点を持つことの重要性、少数民族の文化や言語への関心、日本人としてのアイデンティティ、実践的コミュニケーション能力育成等が反映されています。例えば、平成 17（2005）年検定の『New

Horizon 2』(東京書籍)では、韓国、タイ、中国に住む子どもたちが、日本の漫画について英語でメールしあっているウェブページから、主人公のエミが情報収集をしているところを題材としています。

平成 17 (2005) 年検定の『New Horizon 3』(東京書籍)と『Sunshine 3』(開隆堂)には、それぞれ、英語番組で三味線が紹介されている場面や、文化によるあいさつの違いを理解し、日本人の考え方を説明できるようにするという題材が配列されていて、日本人としてのアイデンティティを考えさせようとしています。

平成 17 (2005) 年検定の『Total English 3』(学校図書)には、ブータン王国がテーマになっていて、少数民族の文化を理解することの重要性を伝えています。

実践的コミュニケーション能力の育成に関しては、生徒にとって身近な場面を設定する工夫が各教科書会社に見られるようになってきました。つまり、ALT や留学生との会話、インターネットによる情報収集、海外への修学旅行などの場面を設定し、実際のコミュニケーションを目的として、英語を使えるようにするということです。例えば、平成 17 (2005) 年検定の『Sunshine 1』(開隆堂)では、登場人物の由紀が飛行機の中で乗客と会話する場面が描かれています。

6. 「グローバル」時代の教科書 (2008～)

平成 20～21 (2008～2009) 年に学習指導要領が改定され、グローバル時代に生きる日本人として必要なコミュニケーション能力を小・中・高等学校を通して育成していくということが示されました。

中学校外国語では、4 技能を統合的に活用できるように指導する、つまり、複数の技能がつながるように強調されています。例えば、平成 23 (2011) 年検定の『New Horizon』(東京書籍)では、Listening Plus の Step 3 で、英語を「聞いて」、答えを「書く」という活動が用意されています。また、Speaking Plus では、リスニングマークが付けられ、重要表現を「聞いて」、それを「書いて」確認する作業が新設されています。また、新学習指導要領では、文法指導とコミュニケーション活動を一体的に行う、つまり、従来あたかも別々のものと考えられてきた 2 つの活動に対し、文法指導はコミュニケーションを支えるものと改めて明示されました。平成 23 (2011) 年検定の『Sunshine』(開隆堂)が、昭和 61 (1986) 年から本文の下に付けられていた目標文を上を持ってきたことは画期的なことでした。

平成 21 (2009) 年から小学校における外国語活動の移行期間として『英語ノート』(教育出版)が、平成 23 年 (2011 年)からは『Hi, friends!』(東京書籍)が、それぞれ配布されています。両教科書ともに、音声面での素地を育成するように構成されています。デジタル教科書も発行され、英語の免許状を取得してこなかった小学校教諭にとっても重要な教材となっています。

平成 25 (2013) 年から新学習指導要領に基づく、高等学校外国語科が始まっています。科目名が一新され、「コミュニケーション英語」、「英語表現」、「英語会話」等、コミュニケーション能力の育成がさらに強調されています。例えば、「コミュニケーション英語」の教科書としては、『Genius』(大修館書店)、『Perspective』(第一学習社)や『Vista』(三省堂)な

どがあります。

7. 終わりに

今回の企画展示を通して、明治期から現代までの英語教科書が、時代や社会の変化や英語教育学研究の成果に応じて、どのように変わってきたのかを、少しでも感じていただくことができたのではないのでしょうか。現在、2年後の教科書改訂に向けて、各社が教科書の内容を見直しています。現在の英語教育の課題がどのように新しい教科書に反映されるのか楽しみです。